

令和6年度 東京都内湾水生生物調査 5月成魚調査速報

●実施状況

令和6年5月21日に成魚調査を実施した。調査当日は中潮で、干潮が9時49分、満潮が16時24分であった(気象庁のデータ)。調査当日の透明度は0.8~1.7mであった。全地点で赤潮が発生しており、St.22の下層が貧酸素状態にあることが確認された。

	St.35		St.25		St.22		St.10	
作業時刻	9:51-11:00		11:05-12:10		12:15-13:05		13:13-14:00	
水深(m)	24.6		13.4		13.8		7.6	
天候	曇り		晴		曇り		曇り	
気温(℃)	21.0		26.5		24.8		26.5	
風向/ 風速(m/sec)	SSE/2.0		SSE/2.4		S/1.0		SE/1.8	
波浪(m)	0.2		0.3		0.2		0.1	
透明度(m)	1.7		0.8		1.0		0.9	
観測層	上層	下層	上層	下層	上層	下層	上層	下層
水温(℃)	20.6	16.7	22.8	17.5	24.1	17.1	24.9	18.6
塩分(ー)	25.9	34.0	19.9	32.1	19.8	32.9	20.0	30.5
DO(mg/L)	13.2	4.8	17.8	2.7	14.0	1.8	18.1	3.8
DO飽和度(%)	171.8	—	232.5	—	187.6	—	245.4	—
pH(ー)	8.6	7.9	8.2	8.0	8.5	7.9	8.5	8.1
水の臭気	微魚腐敗臭	なし	中魚腐敗臭	なし	微魚腐敗臭	なし	なし	なし
備考	赤潮が発生していた。		赤潮が発生していた。		赤潮がパッチ状に発生していた。 下層で貧酸素状態(DO:2mg/L以下)が確認された。		赤潮がパッチ状に発生していた。	

観測層: 上層(0m)・下層(海底面上1m)

●主な出現種等 (速報なので、種名等は未確定です。)

主な出現種等	St.35	St.25	St.22	St.10
魚類	ハタタテヌメリ(c) テンジクダイ(+) ゲンコ(r) マコガレイ(r) イトヒキハゼ(r)	モヨウハゼ(r) メイタガレイ(r)	(出現せず)	アカエイ(+)
魚類以外 (目立った種)	スナヒトデ(m) ケブカエンコウガニ(m) シャコ(m)	スナヒトデ(m) チヨノハナガイ(m) キセワタガイ(c)	クシノハクモヒトデ(m) オウギゴカイ(c) スナヒトデ(+)	スナヒトデ(+) ジンドウイカ科(r) ホトギスガイ(r)
備考	上記の他、タチウオ、メイタガレイ、オウギゴカイ、テッポウエビ属等が確認された。	上記の他、トリガイ、オウギゴカイ、クシノハクモヒトデ、サメハダヘイケガニ等が確認された。	上記の他、トリガイ、サメハダヘイケガニ、イッカクモガニ、シャコ等が確認された。	上記の他、イッカクモガニ、サメハダヘイケガニ、ホンビノスガイが確認された。

注) 表中の()内の記号はだまかな個体数を表す。

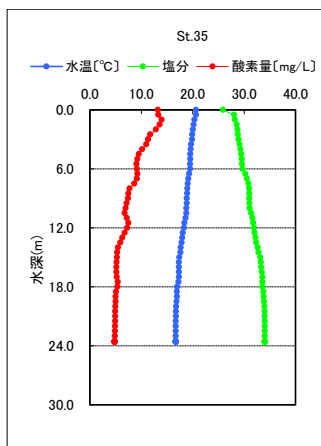
G:1000 個体以上、m:100~1000 個体未満、c:20~100 個体未満、+:5~20 個体未満、r:5 個体未満

調査地点：St. 35

調査地点位置



水質状況



地点状況



南側には東京湾アクアライン「風の塔」が見える。

採取試料



北海道南部以南の日本各地に生息する。水深 50～150mの砂泥底に生息し、底生生物を食べる。

主な出現種 ※写真のスケール 1 目盛: 1mm



全長 14 cmほどになる。オスの前部背びれにある軟条(軟らかいスジ)は糸状に長く伸びる。夏は湾央のやや深い場所に生息し、秋から春にかけては湾奥にも分布するが、これには夏の貧酸素水塊発生が影響していると考えられている。産卵期は 2 月から 11 月。



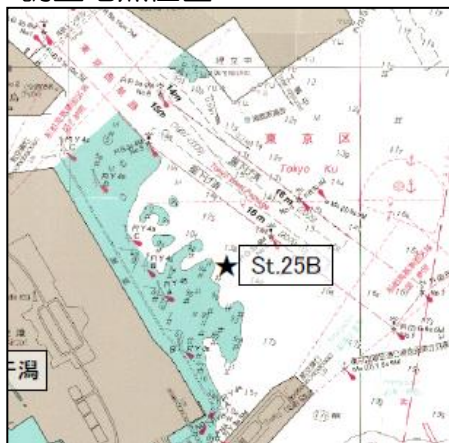
テッポウエビ類と共生するハゼの仲間。内湾のやや深い砂泥底で、エビの巣穴を間借りして暮らす。糸状に長く伸びる第一背びれと体側の褐色横帯が特徴。東京湾全域で出現しているが、湾奥ではあまり見られない。本調査では初出現となる。



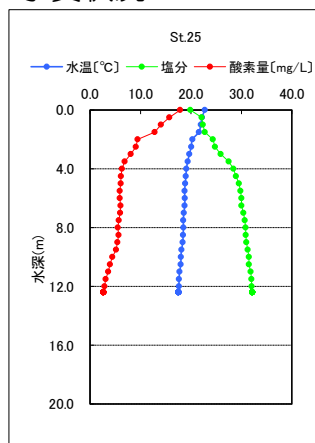
東京湾では普通に見られるカレイの一種。全長 45 cmほどまで成長する。水深 100m より浅い砂泥地に生息し、ゴカイ等を食べる。仔魚の時は左右に目がついているが、次第に左目が移動し、最後には体の右側に両目が揃う。

調査地点：St. 25

調査地点位置



水質状況



地点状況



西側は東京国際空港が見える。

採取試料



内湾の砂泥底に生息する。真珠光沢のある半透明の殻は非常に薄く脆い。千葉県では重要保護生物に指定されている。

主な出現種 ※写真のスケール 1 目盛: 1mm



体長 20cm ほどになる。水深 20～120m の砂泥底に生息し、多毛類等を食べる。名前の由来は、眼の間に棘があり、触ると痛いため(目痛鰈)とされる(諸説あり。)



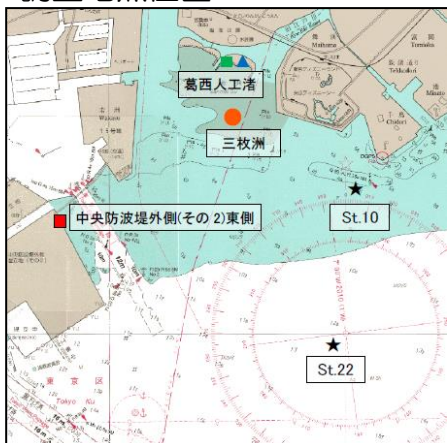
全長 8cm ほどになる。体側に小さな青色の斑点が散在する。東京湾では湾奥から湾中央にかけての水深 10～40m の砂泥底に生息する。



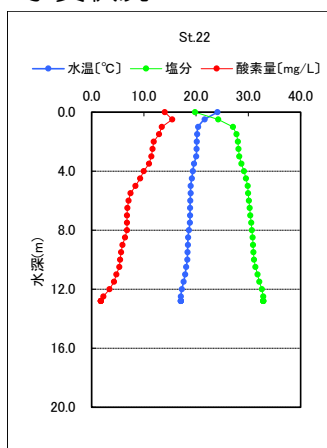
全長 20cm 以上になる大型のゴカイ類。東京湾の泥底～砂泥底では、貧酸素状態の期間を除き、普通に見られる。ゴカイ類は吻(ふん)にある顎片(がくへん)の数や配列等で同定するため、肉眼での識別は難しい。

調査地点：St. 22

調査地点位置



水質状況

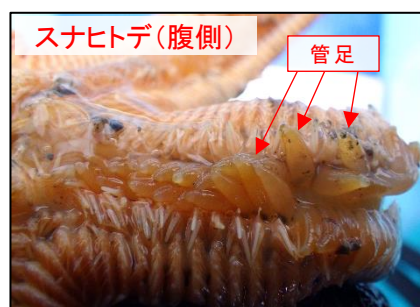
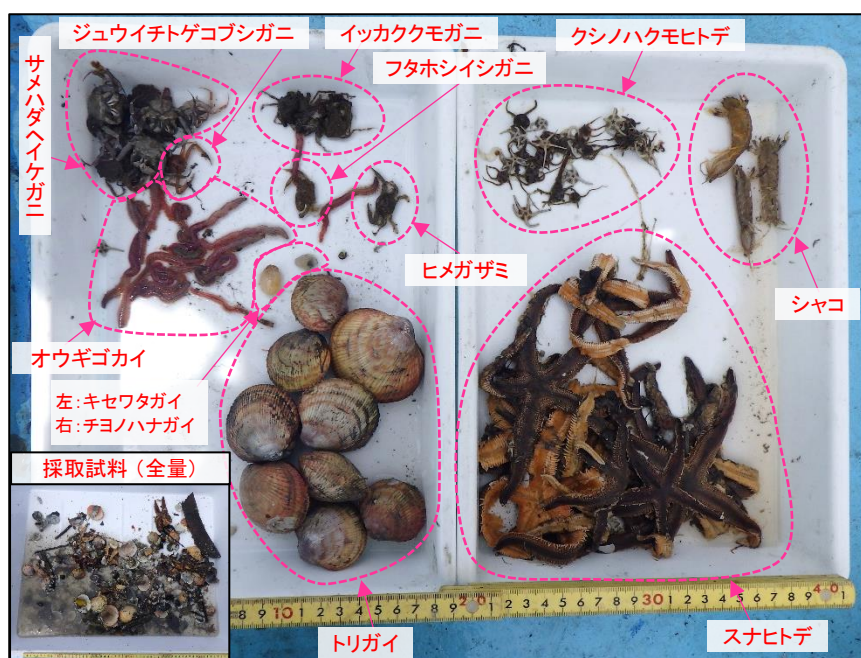


地点状況



北西側には東京ゲートブリッジが見える。

採取試料



内湾の砂泥底に生息する大型のヒトデ。砂中の貝類等を捕食する。ヒトデの多くは先端が吸盤になっている管足を用いて移動するが、本種にはその吸盤が無く、砂泥上を滑るように移動する。通常は5本腕であるが、まれに腕の数が多いい個体が発見することがある。

主な出現種 ※写真のスケール 1 目盛: 1mm



名前にヒトデとつく棘皮動物であるが、スナヒトデ等のいわゆる星型をしたヒトデ(海星綱)とは違う、蛇尾綱の仲間。砂泥底に生息し、クモのような動き方をする。貧酸素に強い耐性を持つ。



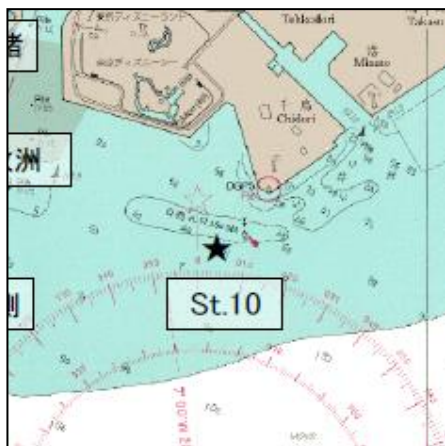
砂底に生息する。甲幅 3cm ほどで、小さい二対の脚がカギ状になっており、二枚貝の貝殻を背負う。ヘイケガニの名は甲羅の模様が怒りの表情に見え、壇ノ浦の海戦で滅亡した平家の亡霊が蟹と化したとの伝説に由来する。今回、抱卵個体が採集された。



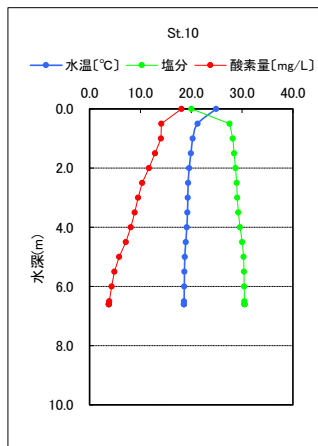
ほぼ球形で、殻は薄く脆い。長い足が鳥の嘴に見えることが名前の由来。内湾の砂泥底に生息し、湾奥では夏季の貧酸素水塊の発生により、ほとんどが死亡する。貧酸素水塊解消後に出現した稚貝は、翌年春に 6 cm ほどまで成長する。

調査地点：St.10

調査地点位置



水質状況

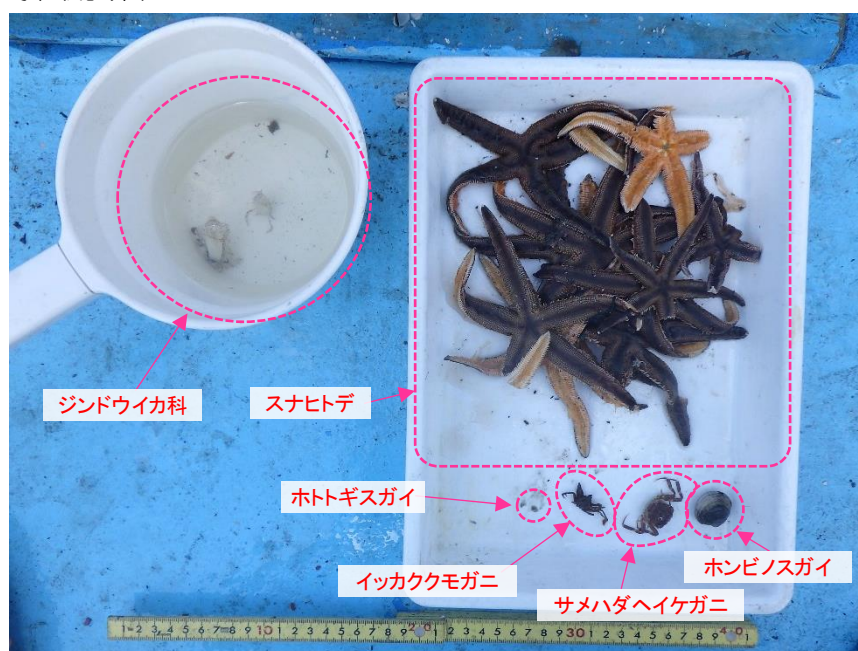


地点状況



北側には、東京ディズニーリゾートが見える。

採取試料



採取試料
(全量)



アカエイ

東京湾で最も普通に見られるエイの仲間。甲殻類や多毛類等を食べる。尾部にノコギリ状の棘(毒針)を持ち、刺されると危険。

主な出現種 ※写真のスケール 1 目盛: 1mm



ジンドウイカ科

現在はヤリイカ科に統一されているが、ヤリイカと区別するため本名称を使用した。日本の沿岸域に広く生息する小型のイカ類で、ジンドウイカ・ケンサキイカ・ヒイカ等と称される、近縁の数種があり同定は難しい。



イッカクモガニ

甲幅 2cm ほどになる。甲らは先端の尖った三角形で、歩脚が細長い。外来種で、有機汚染の進んだ都市圏の港湾や内湾の砂泥底に多い。貧酸素に比較的強く、通年で繁殖する。



ホンビノスガイ

北米原産の外来種で、殻長 10cm を超える大型種。殻は本来白色だが、貧酸素環境で生育したものは硫化物の影響で黒ずむ。東京湾では湾奥部の泥底やカキ礁周辺で多く見られる。